

学びのコミュニティ： プロブレム・ベースド・ラーニング

ゲスト講師 山口 洋典 (立命館大学共通教育推進機構 准教授)

目次

- | | |
|---------------------|--------------|
| 1. はじめに | 4. 活動理論 |
| 2. 大学の学校化 | 5. 学びのコミュニティ |
| 3. プロブレム・ベースド・ラーニング | 6. インタビューゲーム |

※このレクチャー・ドキュメントは、同志社大学大学院総合政策科学研究科とCEL（大阪ガス エネルギー・文化研究所）の教育研究協力協定に基づいて開設した「コミュニティ・デザイン論研究」講座から、2017年12月4日に同志社大学で行われた授業の一部をまとめたものです。

1. はじめに

今日は、デンマークのオールボー大学のキャンパスからお届けしている。この大学は1974年に創立され、創立当初から、今日のテーマでもあるコミュニティとしての学びや、何かを実践することに対して非常に熱心に取り組んでいる大学だ。

デンマークでは、授業の最初に「Why are you here?」（なぜあなたはここにいるのですか）というスライドを出したりして、「今日はどういうことで来ました」「このように思っている」「誰々先生に会う以上はこういうことを知りたいと思って来ました」など、自分が今なぜそこにいるのかという構えを最初にひもといていく。日本では今、付度という言葉がはやっているようだが、何か正しいことを言わないといけなのではないのか、こんなことを聞いていいのだろうか、これだと自分たちの無知がばれるのではないかと、何か相手との悪い距離感を取る流れがある気がする。

人と人が出会い関わっていく上では、むしろ「私はこういうことを知りたい」「こういうことが面白いと思ったのですが、こういう解釈で間違っていないでしょうか」「こういう解釈はないでしょうか」など、意見の違いや経験の違いがあつて、初めて新しい価値が生まれるのではないかと。そして、その関わり合いの過程において、多様な社会問題に向き合っている一人一人が未来のより良い姿を展望していくきっかけが生まれる。そのため、最初に「何かないですか」「あなたはなぜここにいるのですか」ということを共有していくことがデンマークでは通例となっているのだろう。「なぜ来たのか」という問いは相手を遠ざけるものではなく、むしろ近づけるためのものである。一人一人がそこにいる意味をお互いに尊重するため

にも、今ここに私たちがいる理由がよく問われる。

こうしたやりとりの過程を一言で言うと、コンストラクションやビルディングという。コンストラクションは建設で、ビルディングも建てるという意味である。何を建てるかという、知識（ナレッジ）を建てている。知識を建てていくビルディングナレッジやコンストラクティングナレッジなど、一人一人の思いや経験を組み合わせることで新しい解釈をつくることで、新しい価値が生まれる。オールボー大学では、PBL（プロブレム・ベースド・ラーニング）という手法を導入することにより、工夫されたカリキュラムが展開されている。

今日は、私のこの8カ月あまりのオールボー大学での経験と、これまで取り組んできたサービス・ラーニングの経験、そして、皆さんと同じように大学院生だった時期の経験、そうした自分のこれまでの物語を重ね合わせて、皆さんと語り合いたい。特に学びのコミュニティをつくる、支え合う、学び合う、高め合う、社会をより良いものに導くという、自立した市民になっていくような学びのコミュニティをデザインするための知恵を深める機会としたい。

2. 大学の学校化

日本では、大学が高校までと同じ学校のようになっている。さすがに大学院は違うと思いたいが、大学では学生が自らを「生徒」と呼び、一人称だけでなく二人称も三人称も生徒になっていることがある。「生徒たちの思いを聞いてください」などが一例である。私はあなたの思いを聞くし、皆さんの思いも聞くのだけれども、別に「生徒たち」とくくらないでほしい。そもそも大学には生徒手帳はなく、自分たちで自

分たちのことを決めていいはずだ。休んでも、それは何か理由があつてのことのはずが、出欠を取ることが多い。学生証で出欠を管理する場合もある。このように、大学が非常に学校化してきていることを、私は危惧している。

私は2006年から2011年まで同志社のソーシャル・イノベーション研究コースの教員をして、その後、立命館に移った。大学院の教育から、学部の1回生から8回生まで、学年を問わず、教養を身に付けるためにまちに出るサービス・ラーニングによる学びのコミュニティづくりへと役目が変わった。

学校化というのは実は古い言葉である。イヴァン・イリイチが1970年に著した『脱学校の社会』が、日本では1977年に翻訳された。その中で「学校化 (schooling)」、それに対して「ディスクリーニング：脱学校化 (deschooling)」と言った。スクーリングとは社会が学校になっていくことで、学年があつて、年齢別に区切られて、出席が管理されて、そもそもそこにいればいいと、制度化の弊害が指摘された。そして出席することが大事とされるものの、出席とは参加とは少し違う概念で、45分座っていればいいという性格である。もっと言うと、おとなしく45分座っている子がいい子とされる。そういう規範や基準が生まれることによって、管理する側と管理される側、先生と生徒が固定的かつ一方通行の関係に置かれることを問題にしている。

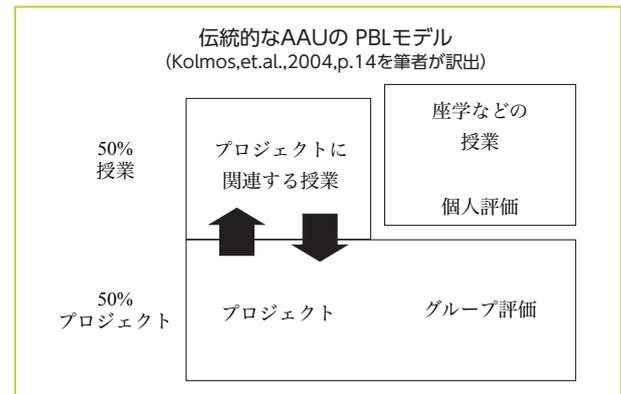
文部科学省の学校基本調査によると、現在の大学の進学率は54.8%である。大学の進学率が年々高くなっていく中で、大学の学校化も進んでいる。大学は、人々が何か分からないことを知りたいと思ってやってきて、自立 (インディペンデント) と自律 (オートノマス)、そして協働 (コラボレーション) によって、一人一人が尊重された上で互いに新しい価値をつくっていき、分からなかったことを社会や人生、地域の暮らしの中に生かしていくというのが果たすべき機能の一つだったはずである。ところが、その機能より、存在価値が制度化されてしまっている。分かりやすく言うと、偏差値で表れる入試難易度が重視されて社会に位置づけられてしまった。本来の機能と比べれば、実にもったいない。オールボー大学という、一風変わった教育を行っている大学を選んで1年間滞在しているのも、まさにその理由からである。

3. プロブレム・ベースド・ラーニング

オールボー大学では、プロブレム・ベースド・ラーニングという教育法を大事にしている。ただし、広い意味では、プロ

ジェクト・オリエンティッド・プロブレム・ベースド・ラーニングで、間を抜けばプロジェクト・ベースド・ラーニングをやっていると言えなくもない。

プロジェクト・ベースド・ラーニングとプロブレム・ベースド・ラーニングは両方 PBL と言われる。プロジェクト・ベースド・ラーニングは、プロジェクトで学ぶことが大事だという学び方である。そのため、プロジェクトを組むことが一番大事にされる。プロジェクトを組むときには、どういうメンバーで、いつまでに、何をするかというタスクが明確になっていることが大事となるため、プロジェクトチームはタスクフォースとも呼ばれることがある。大体こういう組織論の用語は戦争がベースになっており、戦略部隊や戦術部隊と訳される。ともかく、プロジェクトは必ずお尻が決まっている。そして、なすべきこと、目標が決まっている。これがプロジェクトベースのラーニングである。ゆえに、プロジェクト・ベースド・ラーニングでは、何をすべきかということが用意されていて、その上で最高のパフォーマンスを出すことがメンバーに求められる。



しかし、オールボー大学は、プロブレム・ベースド・ラーニングである。プロブレム・ベースド・ラーニングでは、問題が解決されるという成果と、そのための学びのプロセスの双方が大事にされる。問題が解決されることが大事ということは、問題の定義も大事になってくる。一人一人が、何を問題として設定するかが決定的に重要である。プロブレムは、ソルブ (解決) しなければならない。例えば、家族の温かさを感じてほしいというトピックに対して、何が問題になるのか。そのとき、標準家族が前提になっていて、家族の形が多様になっていることに理解が及んでいないのではないかなどが教員などから問われる。こうして各々の関心の中にある出来事や見えているものや感じていることの背景を掘り下げていくことが問題を設定するということである。

問題が設定できれば、次はどう解決していくのかが問われてくる。その解決の在り方として、シナリオやプランという言葉

葉が使われる。PBLでは、大学とは、そこで学ぶ人間が将来、高度職業人として世の中で自分の役割を果たすようになることが使命であるという前提に立つ。つまり、大学で学ぶということは、卒業した後に自分が専門とする領域で、自分が問題だと捉えるトピックにコントリビュート(貢献)・従事していく準備をする時間だと位置付けて、問題を特定し(プロブレム・フォーミュレーション)、それを形式化、定式化して問題を設定することによって、その問題にどうアプローチしていけばいいかを構想・設計する経験を積む機会と位置づけられている。私もそうした学びの場づくりにあたってきたため、指導・監督するには習得すべき理論があり、経験だけではよい場づくりができないと常々感じてきた。問題へのアプローチの際には、先行事例の中から何を参考にし、何を参考にしないのかという判断をした上で、その問題が解決した状態を描き切る必要がある。さらに、その状態になるにはどういうプロセスをたどればいいのかというシナリオ、計画を作っていくことが、オールボー大学では日常的に行われている。少人数の集団によるプロブレム・ベースド・ラーニングで、問題をとことん掘り下げ、その解決に向けてささやかな実践をする。それを学部時代から徐々にやっていく。ただ、学部や学年を混ぜず、あくまで専門性の習得のために、1回生のPBLではこれ、2回生のPBLではこれ、3回生のPBLではこれという具合にカリキュラムが構築されている。

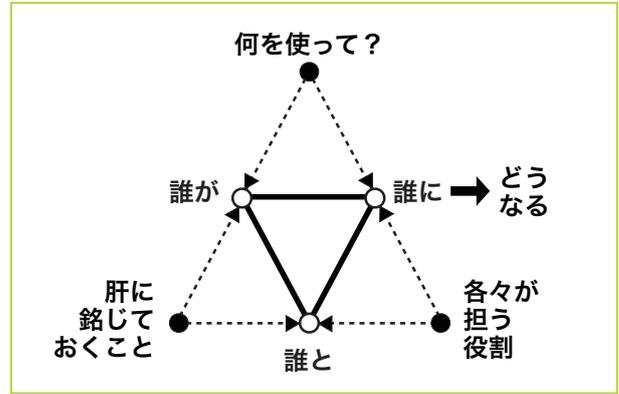
Diana Stentoft 准教授による PBLの3類型
(2017年5月10日のセミナーの資料を筆者が訳出)

	症例 (主に学士課程) PBL	プロジェクト PBL	臨床 (主に修士課程) PBL
学術的な問題の 選択における自由度	低	高	低
仲間の受講生と 共に協働する必要性	比較的低い。原則的・形式的には個人の成果が成績評価の対象になる。教育的には相当の協働が求められる。	比較的高い。十分な質の成績評価のためには、他者との協働のもと成果が生み出されるかに依存する。	相当高い。加えて複数の情報源を統合するために同僚、当事者、関係者からの貢献が必要とされる。
もたらされる時間	学士課程は1週1件 修士課程は1日1~2件	3週間~5ヶ月	午後1~3の事例 複雑さと特殊性による
教員の役割	学生らが学びの目標に集中し求められる方向へと努力するよう促す	プロジェクトの一般的な論点の取り扱いに関して指導し監督する	学生らを助け、学びの目標への到達を促す。事例の論点に専門的な洞察を提供する専門家としての役割。

4. 活動理論

ここに三角形の図がある。この図はかなり簡略的に表現したが、オリジナルは社会心理学者のユーリア・エンゲストロームによる活動理論で、ヴィゴツキーというロシアの心理学者による媒介手段に関する理論を拠りどころにしている。

今日はこれを使って、皆さんに、オールボー大学で行われている問題解決学習と、私がベースにしている社会心理学の中のグループ・ダイナミクスという観点を相まみえて、社会問題を自分に引きつける発想を紹介する。放っておけないことが少しでも良い方向に変わっていく日常をデザインしていくためのコツをつかんで欲しい。



この図の見方としては、まず太い実線を見てほしい。「誰が」「誰に」と書いてある。この「誰が」は「私」でも何でもいい。「地域」でもいいし、単数形である必要もない。「親が子どもに」でも「ジャイアンがスネ夫に」でも、「のび太がスネ夫に」でも、「恋人がパートナーに」でも何でもいいので、分かりやすい関係をイメージしてほしい。普通、人間関係は、この二者関係が大事にされる。しかし、この二者関係は、強いようでもろい。イエスカノーかの世界になりがちのためである。

「誰が」「誰に」の下に太線が伸びて、「誰と」と書いてある。この逆三角形ができると、少し関係が変わる。イエスとノーだけではなくて、1人目がイエス、2人目がイエス、3人目がノーと言うと、「何で」ということで議論が始まる。この活動理論は、人間関係の基本を二者関係ではなく三者関係で捉える。誰が、誰に、かつ、それが誰とつながり合っているのか。あるいは誰とつながっていないのか、なぜ二者関係になっているのか、そうした関係性に着目していく。

例えば、「最近、元気?」と私が親に電話して、健康を気に掛ける活動をするとする。そのときに、何かよく分からない話があれば、弟が実家の近くに暮らしているので弟に顔を見せよう。つまり、私と親の関係に、仲間として第三者を入れた関係、私とあなたの関係の中で仲間との関係をどううまく取り扱っていくかが鍵になることは想像しやすいだろう。人間関係は、自分が向き合う相手という二者関係だけではなく、自分が向き合う中でそれを支えてくれるであろう仲間、あるいは気付いていないかもしれないけれど誰かの支えがあって私とあなたとの関係は成り立っている。二者関係と思われると

ころも、実は第三の存在がいて初めて成り立っている。

気付いているかいないかにかかわらず、人間関係は第三者の存在が機能しているということが活動理論のポイントである。この講義が、先生方や、TA などによって支えられていることは目に見えて分かるが、実は教室の外で、静かにこの教室の環境を保ってけている他の院生の皆さんの何気ない協力があって、私から皆さんへの遠隔講義が成り立っている。もし廊下でうるさかったら、「授業中なので静かにしてください」とお願いしなければならないものの、それを言わなくて済んでいるのは、外にいる人たちが6時25分から7時55分までは授業の時間だと知っていて、静かにしてくれているからである。目前に広がる風景だけではなく、もう少し鳥のように視点を広げて世の中を見てみると、あらゆる人の協力や支えがあって、世界が成り立っていることがわかる。

その構図を整理するために、さらに大きな三角形に関心を広げていく。「誰が」「誰に」の上に「何を使って?」と書いてあって、点線が引かれているが、これは、私と皆さんの間には何が経過しているかという手段への関心である。私は今、Apple の FaceTime という技術を使って皆さんにアプローチしている。インターネット技術ゆえに形がないので、ストレートに皆さんに話し掛けているような気がするが、その裏には複雑なシステムが動いてアクセスしている。それと同時に、私は日本語を使って皆さんにアクセスしている。そういう手段は、今日は何を使っているかを気にしたら点線ではなく実線になるものの、普通はあまり気にしていない。ただ、日本語で、インターネットでアクセスしていることが特別に感じていないためだ。これが、活動理論でいうツールという要素である。ヴィゴツキーも、人は何かの手段を媒介してアクセスしていくと言っている。家族であれば、団らんの時間を使ってアクセスする。親と子どもが温かい時間に包まれるときには、それを可能にしている何かがあって、それはお茶だったり、優しい言葉だったり、何かの関係を成り立たせている。何かを使って人と人が関係を結ぶというのがヴィゴツキーの理論で重要な点である。

その上で、エンゲストロームは、人間の基本を、気付いているかいないかにかかわらず、いろいろな人の助けや支えがあって成り立っているとして、ヴィゴツキーの理論を広げた。では、第三者がどのように私とあなたの関係を成り立たせているのか。まず、「誰が」と「誰と」から点線で伸びている「肝に銘じておくこと」に着目してほしい。単純に言えば、これはルールと呼ぶことができる。ルールは自分たちで作って自分たち

で守っていくものだが、いちいちこれをルールにしましょうと確認しないことが多い。そういう場合は、ノーム(規範)になる。ルールというと、規則を作るものと理解しているかもしれない。一方で、作るまではいかない、ノーム(規範)という包み込まれる雰囲気も含まれる。空気を読むということに対して、空気を書くということも時々求められる。私が皆さんにアクセスする際に、それを支える側は何を肝に銘じておいた方がいいのか。今、教室の外にいる人たちが静かにしておこうということは、別に私がいちいち文書を作って、「この時間はデンマークとやりとりするので、こういうルールを作りました」とお願いしたわけではない。大学院の授業の時間だからということ大きなルールとして誰かが分かっている、つまり、肝に銘じているということがあって、三者関係が成立している。

一方で、「誰に」と「誰と」から点線で伸びているのが、「各々が担う役割」である。皆さんと仲間の間にはどのような役割があるのか。例えば親と子どもの関係にベビーシッターが関わるとすると、ベビーシッターはあくまで一時的に子どもの面倒を見るということでしかないが、一時的だからこそ担うべき役割がある。子どもがそれをどこまで認識しているかは分からないものの、子どもは子どもで、言葉を使ってやりとりできる年齢であれば、言葉を理解し、「お母さんにそんなことは言われていないから嫌だ」ではなく、支えてくれる人との温かい関係を家族以外でもつくっていくことによって、安全な関係を成立させるといった目的が達成される。

5. 学びのコミュニティ

今日は学びのコミュニティがテーマなので、その活動の構図をこの理論で示すなら、「誰が」が先生でないことを私は求めている。先生が「誰と」にいる学びのコミュニティが生まれてほしい。高校までの授業は、生徒に賢くなって欲しいと先生が教える。しかし、大学の授業は学生が主役で、「誰に」は特定の人物ではなく社会だったりする。社会がより良くなっていくために先生と協力して、例えば何かを教わる、文献を紹介してもらおうということがされていくはずだ。

そのときに皆さんが何をを使うかということ、知恵を手がかりにしているだろう。理論や先行事例などを使い、社会に対して働き掛けていく。他の町ではこういう事例があるけれど、今はこれを大事にしよう問題提起していく。肝に銘じておくことは、協力者と共に何をしていくかである。社会心理学の話がだんだんまちづくりやコミュニティ・デザインの話になっ

てきたことに気付いてもらえればありがたい。自分が誰かに関わっていく際には、言葉は悪いが、仲間をうまく利用している。私が何かをするとき、二者関係ではなく、第三者も巻き込んだより良い関係づくりをしていくことによって、その人の役目が出てくる。

支援の場で生まれる落とし穴も、このことで説明できる。支援者が主役で、支援される側がいるという固定的な関係がつくられることがよくある。よかれと思ってやる for you の活動だ。あなたのためと思ってやるのだが、支援者はずっと主役だから、疲れる。では、どうすればいいかというと、当事者が主役になればいい。当事者が主役となって、例えば家族や職場など、いろいろな場面に生き生きと参加していきけるようにする。そのためにどうすればいいかというと、支援者が「誰と」にいればいい。要は with の活動にする。支援者と共により良い関係をつくっていく活動が求められる。

言葉を置き換えると、「何を使って?」は「ツール」、「肝に銘じておくこと」は「ルール」、「各々が担う役割」は「ロール」となる。ロールプレイングゲームのロールである。そして、「誰が」「誰に」の先にある目的とする状態に持っていく活動として、人々の人間関係をより良くしていく必要があると捉えようと、人は仲間と一緒に良いツールを作り、あるいは選択し、適切なルールを作り、あるいは作り変え、そして一人一人が何らかのロール(役割)を持っていなければならないと、この理論は教えてくれる。

さらに言葉を置き換えると、「誰が」は「主体」、「誰に」は「対象」となる。主体性を持つということは、自分が「誰が」にいるということであって、主体性を持たせるということではない。しかし、よく主体性がないことを批判する人たちは、主体性を持たせる、しきりに「誰が」の立場に立とうとする。私がおあなたに主体性を持たせるという活動に必死になる。それをやり続けていたら、永遠に主体性は育たない。主体になる環境をどうつくるかが鍵である。つまり、誰かが何かを支援をするなら、for you、あなたのためにと思えば思うほど、with というつなぎ役にならないといけない。そうしてよりよい関わり方を学習する。活動理論は三者関係を基本として人間関係のより良い形を見つめ、見出すための理論である。

6. インタビューゲーム

最後に、皆さんに活動理論をもとにそれぞれの日常生活をひもといてほしい。2人ペアになって、何気ない問

題を、仲間と一緒に何をしていったらいいのか、誰が主役になったらいいのかを、活動理論の三角形を質問形式にして整理してみた。今、皆さんがもやもやしていることに対して、「なぜほっとけないの?」「いつからほっとけないの?」「誰が困っているの?」「その人はなぜ困っているの?」「そのままほっとくとどうなるの?」「どうなったらいいのか?」「いつまでにそうならいいのか?」「そもそも何でほっとかれているの?」という八つの質問にまとめた。加えてインタビューする人が自由に問い掛けをしてほしい。例えば家族の温かさをみんなに感じてほしいとか、若者が幼稚に扱われるというトピックの背後にある問題が何なのかということ掘り下げるとする。それによって、皆さんの抱えているもやもやが少しでも晴れていくシナリオの手掛かりを見いだしていく補助線として、先の質問に活かされれば願っている。それは結果として、問題設定のためのワークとなる。

時間は短い、5分ずつ、2人組になって、皆さんがそれぞれ放っておけないことについて、なぜ放っておけないのか、お互いにインタビューしてほしい。答える人はとことん話すだけで、聞く人はワークシートに聞きながら書きとめてほしい。インタビューが終わったら、そのシートは相手へのプレゼントになる。皆さんが今、放っておけないことはこういうことかと受けとめる機会にしてほしい。

今日は活動理論を使って、私がおあなたに関わるということだけではなく、誰かが主役になっていくためには何が必要かという人間関係を、六つの要素で整理することをお伝えした。それによって自分が漠然と思っている問題、その中にある問題、トピックの背後にある問題を掘り下げていくことができることを理解してほしいと、このワークをしている。これらは、単に分析して誰かに問題をなすり付けたり、非難するために使うものではなく、あくまで自分がシナリオを描き、それをどう実現していくかということ問うている。

オールボー大学では、活動理論だけを使っているわけではない。あくまで専門家としての職能を鍛えるために、まずは今、自分が学びの主体となって大学生活を送り、そこから自分が間に立つために、三角形の下に行くためにどうしたらいいのかという素養を磨いていくことをPBLを通じて行っている。リアルな社会問題をどのように自分の問題として扱っていくか。これはオーナーシップやハンドリングなどと呼ばれ、社会への関心を自分の手元に置き続けていくということである。